

近世の飲食空間の立地場所からみた江戸・東京における土地利用の構成

茨城大学大学院 学生会員 ○森本 佐理
 茨城大学工学部 正会員 小柳 武和
 茨城大学工学部 正会員 桑原 祐史

1. 研究の背景と目的

現代の東京では都市化の進行とモータリゼーションを中心とした都市整備によって、人々が気ままに立ち寄り、過ごせる公共空間の減少が問題となっている。このような社会背景から、近年では「パブリックライフ」という公共空間主体の新たなライフスタイルが生まれ注目を集めている。

前述した公共空間について寺社や水辺、墓地に着目した都市空間の構成や変遷に関する研究がある。また、文化・習慣について研究したものがあり、その中に「茶屋」という飲食空間が、近世のライフスタイルとして浸透していたことも確認できる。しかし、公共空間の利用という観点で茶屋と現代の都市空間の構成に関する研究は少なく、本研究が茶屋という文化・習慣の観点から歴史的に公共空間を分析することにより、現代の都市空間の構成や変容について新たな側面を見出すことにつながると考える。

したがって本研究では、茶屋と立地場所の関係性から近世の公共空間の構成を明らかにする。さらに土地利用について現代と比較分析することで茶屋と現代の都市空間の関係性を明らかにすることを目的とする。

2. 「江戸名所図会」からの茶屋の抽出

分析対象資料として、近世の江戸庶民の日常生活風景と景勝地について詳細に描いた「江戸名所図会」を扱う。本研究で扱う茶屋の定義を以下のように設定し、(1) 図絵中に茶屋の記載があるもの。

(2) 記載がないもので(1)を参考にして形態、動作から茶屋と判断できるもの。

これらを満たす図絵から茶屋の抽出を行った。結果、図絵 742 点中 130 点を分析対象図絵とした¹⁾。

3. 茶屋の立地場所と公共空間の関係

対象図絵 130 点に描かれている茶屋の立地場所について分析を行い、図名と「復元江戸情報地図」から立地場所の特定を行った。結果、寺社 (78/130)、水辺 (19/130)、橋の連結部である橋詰 (11/130)、地形的特徴のある山・坂 (8/130)、街路 (14/130) という公共

空間に位置していたことが確認できた。このように立地場所の分析から 5 つのタイプに分類することができた。

また、茶屋には娯楽性と商業性という 2 つの特徴があり、立地する公共空間によってその特徴が異なっていたことが明らかになった。

4. 江戸と東京の比較・分析

「復元江戸情報地図」から茶屋の所在地を特定し、プロットすることで茶屋分布図を作成した。さらに東京 23 区の区界と重ね合わせることで、茶屋分布数と立地場所について整理し、区をもとにした分析範囲の選定を行った (図 2)。

ここでは選定に偏りが出ないように茶屋分布数及び立地場所のタイプを考慮し、分布数が上位 2 区である台東区 (17 点) と港区 (16 点)、同分布数 (10 点) で立地場所のタイプに偏りが少ない中央区と文京区を分析範囲とした。

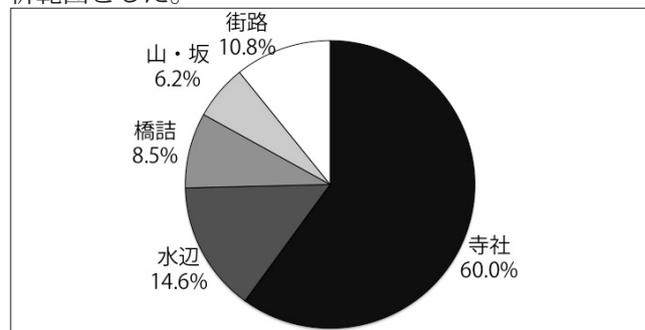


図 1 茶屋の立地場所タイプ
 図 1 註) 対象図絵 130 点に対する各抽出数の割合

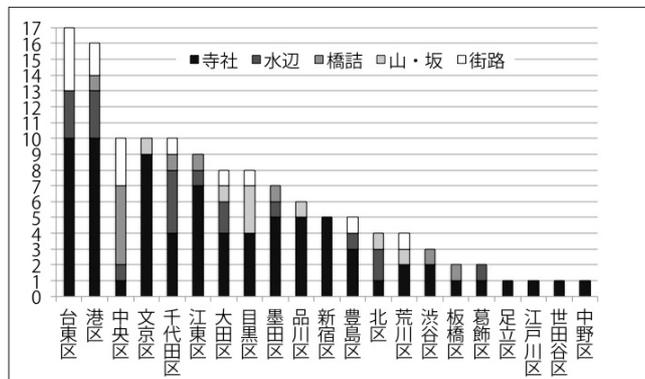


図 2 区ごとの茶屋分布数と立地場所タイプ
 図 2 註) 縦軸が抽出数を示し項目ごとに色分けされている。

5. 現代における茶屋空間と土地利用の関係

分析範囲4区の茶屋分布図と平成18年度作成の土地の利用現況図を重ね合わせ土地利用の変化に着目したタイプ化(A商業地型、B住宅地型、C公園型、Dその他型)を行い、茶屋空間と現代の都市空間の関係性をみた(図3)。

台東区では寺社であるAの周辺は商業地となっている。茶屋が敷地内外に多くあったため、商業の特徴が現代に残ったと考えられる。Cは公園になっており、花見や景色を鑑賞するという茶屋の娯楽性が公園という形で残ったと考えられる。Dは現在駅になっている。寺社の門前や広小路に茶屋が位置しており、人々の往来の多さが場所として現れたと考えられる。港区ではAは寺社地であり、現代では公園として利用され、また周辺が商業地となっていることから、茶屋の持つ商業性と娯楽性という2つの特徴が現れた土地利用であると考えられる。Dは海辺に沿って茶屋が位置していた場所であるが、現代では埋め立てられて駅となっている。中央区では全てがAに該当し、商業地として

現代において利用されており、橋自体も現存している。文京区では全てにおいて周辺が住宅地として利用されている。これは茶屋が位置する寺社を、町家が取り巻くように配置されていることから確認できる。

6. 結論

以上、茶屋の立地場所からみた公共空間の構成を分析した結果、5つのタイプを見出すことができた。さらに茶屋の分布と土地利用現況図を重ね合わせることで、立地場所から茶屋の分布図を作成し、現代の土地利用現況図と重ね合わせることで茶屋周辺の土地利用を把握することができ、茶屋と現代の都市空間の関係

文註

1) 朱引と墨引による江戸の範囲と23区界がほぼ重なると考えられるので、所在地が23区内にある茶屋を対象とした。

参考文献

- 1) 日本随筆大成刊行会：日本図絵全集 江戸名所図会、1928
- 2) 朝日新聞社：復元江戸情報地図、1994
- 3) 大橋友香子：近世における屋外・半屋外空間の飲食利用形態に関する研究、日本建築学会大会学術講演梗概集、2004.8
- 4) 高橋俊也、渡辺菊真、布野修司：京都における墓地の立地と市街地の変遷に関する考察、日本建築学会計画系論文集、第619号、133-139 2007.9
- 5) 千葉一輝：江戸・東京における眺望の変容に関する研究、日本建築学会計画系論文集 第481号、pp157-166、1996。

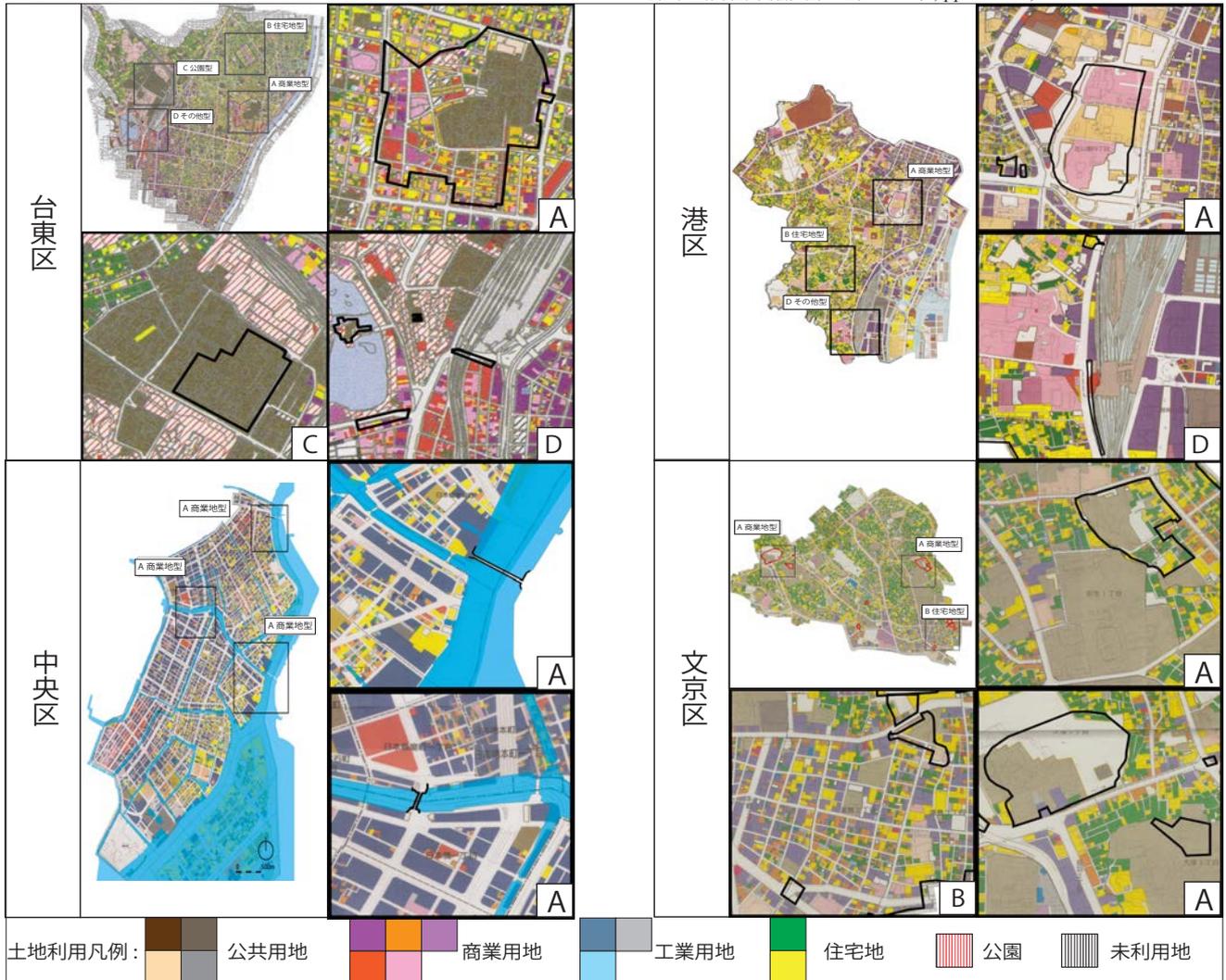


図3 対象4区の茶屋の分布と土地利用の関係

図3註) 該当する江戸期の寺社、水辺、橋の敷地範囲を黒線で囲んだ。